

## 第104回日本精神神経学会総会

## シンポジウム

## 英語から翻訳された病名呼称用語は妥当だったか——「社会恐怖（社会不安障害）、行為障害、外傷後ストレス障害」の場合——

豊嶋 良一（埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科）

〈索引用語：病名、用語、社会恐怖、行為障害、外傷後ストレス障害〉

## 1. はじめに

現在わが国では、精神障害の病名呼称はICD-10、あるいはDSM-IVの英語病名を日本語に翻訳したもの<sup>2,4)</sup>が広く用いられている。ことに医療制度・行政場面ではICD-10からの翻訳病名が公的に使用されている。このように社会で広く用いられる病名呼称用語の選定・制定にあたっては配慮すべき点がいくつかある。たとえば、一般の人々がその病名呼称から症状内容をおおよそ推測できること、他の疾病や症状と混同されにくいことなどが挙げられよう。

しかし、ICD-10やDSM-IVの病名呼称のこれまでの日本語訳を見直すと、上記の点を満たしているかどうか危惧されるものがいくつか見受けられる。たとえば「社会恐怖（社会不安障害）」（DSM-IV）、「外傷後ストレス障害」（ICD-10とDSM-IV）と「行為障害」（ICD-10とDSM-IV）である。筆者は2006年9月、精神神経学会の精神科用語検討委員会に手紙を出し、これらの病名訳語が英語の原意を反映していないことを指摘し、訳語を再検討するよう提案した。また社会の人々がこれらの病名呼称から、本来と異なる病状を連想してしまうおそれはないかどうか、簡単な調査を行ってみた。その結果、これらの訳語は調査対象者の過半数に、本来とは異なる病状を連想させることが判明した。その結果を報告し、なぜ誤解

されやすいのか、誤解されないためにはどういう翻訳が望ましいのかについて考察する。

## 2. 調査方法

2007年9月から10月にかけての約2週間、大都市部（東京都品川区）のある眼科診療所の待合室のテーブルに、調査の趣旨説明を添えたアンケート用紙を置かせてもらった。その用紙を自発的に読み、任意に匿名で記入し、回収箱に投入した者を調査対象者とした。また、筆者の知人に用紙を預け、その知り合いで任意に調査に協力した者、約10名も調査対象とした。

アンケート用紙の設問文は「みなさんはこの名称から、まずどんな症状を連想されますか。あなたが連想するほうに○印をつけて下さい」というもので、連想する病状については、表1のとおり、二者択一の選択肢が用意された。

## 3. 調査結果

調査に応じた者の総数は69名で、内訳は男性14名、女性54名、性別記載なし1名、年齢構成は10歳代2名、20歳代9名、30歳代12名、40歳代16名、50歳代14名、60歳以上14名、記載なし2名であった。回答結果は表1のとおりであった。

表1 アンケートの設問内容、およびその回答結果  
(回答者 69 名)

設問：みなさんはこの名称から、まずどんな症状を連想 されますか。	
あなたが連想するほうに○印をつけて下さい。	
1. 「社会不安障害」	
a 外で働く自信がなくて引きこもる	83 %
b 人前で緊張しすぎてあがってしまう	17 %
2. 「行為障害」	
a 不器用でいろいろな動作がうまく出来ない	65 %
b 青少年期に窃盗や他者への暴力などを繰り返す	35 %
3. 「外傷後ストレス障害」	
a 身体の怪我がきっかけでおきた心理的 症状	68 %
b 心理的トラウマによっておきた心理 的 症状	32 %

(数値は設問に対して、a または b のそれぞれに○をつけた者の割合)

#### 4. 考 察

##### (1) 調査結果の意味すること

この調査の対象者はわが国の人口構成を偏りなく代表しているものではないし、またアンケートの設問が「病名」から連想される症状を幅広くカバーしたものでもない。しかし少なくとも、この調査対象者の過半数の人たちが、「社会不安障害」からは「対人緊張」より「社会で働く自信がない」こと、「行為障害」からは「社会的に許されない問題行動がある」というより「不器用で動作がうまく出来ない」ことを連想し、「外傷後ストレス障害」の「外傷」については「身体の怪我」と受け止めていた。このことから、日本の社会ではこれらの日本語訳病名は本来の病状とは異なった病状を人々に連想させるおそれがあるといえるだろう。

##### (2) 原語の意味と訳語の日本語の相違

では、なぜこういう事態がおきたのだろうか。病名に用いられたもとの英語がおかしいのか、それとも翻訳された日本語がおかしいのだろうか。そこで病名に使われたそれぞれの英語の元来の意

味を探り、訳語の日本語と対比してみる。

##### i social anxiety disorder と「社会不安障害」

「社会不安障害」の原語、social anxiety disorder では social という単語が用いられている。この語義を研究社新英和大辞典第6版<sup>3)</sup>で調べると、① a 社会の、社会に対する、社会的な、b 社会的地位の、c 社会福祉の、d 社会主義の、② a 社交的な、社交用の、懇親の、b 人づきあいのよい、打ち解けた、社交的な、③ a 社交界の、上流社会の、b 上流人らしい、あらたまつた、④ a 社会生活を営む、b 群居する、などの語義が挙げられている。つまり英語の social の語義は多義的で、①のように〈国家全体までも広がった社会〉というニュアンスから、②のように〈小規模の交際範囲〉を指す場合まで、また公的人間関係から私的対人関係にいたるまで、すべてを social という一語が表現しているのである。従って social の訳語を選ぶ際には、それが上記①から④の、どの語義に相当する意味で用いられているのか、よくよく吟味する必要があるということになる。

では social anxiety disorder という病名のなかでの social の意味はどれに相当するだろうか。social anxiety disorder は人まえや人づきあいの場面で過度に緊張したり、過度に不安に感じるというものである。実際、ICD-10 の social phobia の説明文<sup>4)</sup>の中には、「比較的少人数の集団内で(雑踏とは対照的に)他の人びとから注視される恐れを中核とし」との叙述がある。従って、ここでの social の語義を前記の辞書で列挙された語義の中から選ぶとすれば、①で挙げられている「社会」よりは、②で挙げられた「社交」、「懇親」、「人づきあい」の系列の語義に近いものと思われる。これに対比して、翻訳病名に取り入れられている「社会」という日本語には、②のような身近な範囲の交遊を指すニュアンスはない。本調査対象となった人たちが「社会不安障害」の症状として「人前で緊張しすぎてあがってしまう」ではなく「外で働く自信がなくて引きこもる」を連

想してしまった理由は、日本語訳で用いられた「社会」という語が社会全般を指し示すものと受け取られることに起因していると思われる。

#### ii conduct disorder と「行為障害」

「行為障害」の原語の英語にある conduct の語義は前記の英和辞書によれば、①（道徳上からみた、人の）ふるまい、行い、品行、操行、行状、②経営、運営、処理、管理、③指揮、指導、案内、護送、④処置法、⑤指導者、ガイド、が語義として挙げられ、本病名の訳語に用いられている「行為」ということばは見当たらない。本辞典の①の解説のごとく、conduct という英語は単なる「行為」を指すのではなく、その行為の道徳的是非・善悪が問われるような振る舞いを指すものと理解される。それに対比して日本語の「行為」という語彙には、ことさらに道徳的是非・善悪が問題となる行為を指すというニュアンスは含まれていない。本調査で多くの調査対象者が「行為障害」について、「社会的に許されない問題行動がある」というよりも「不器用で動作がうまく出来ない」ことを連想したのはもっともなことであったと言える。元来の conduct disorder という英語の意味することを忠実に翻訳するならば、conduct の訳語は上記の①に挙げられた「品行、操行、行状」や、あるいはそれと同義の「素行」などから選ばれるのが妥当である。

#### iii post-traumatic stress disorder

英語の traumatic の語義は前記の英和辞書によると、①（心の痛手となるほど）不快な、②創傷の、外傷（性）の、外力（性）の、となっている。この辞書の語義の配列は「現代の用法としてもっとも一般的なものから順次特殊なものへ」という順としたとされているので、上記の配列からすると、現代英語の trauma は「(からだの) 外傷」よりもむしろ、「心的外傷」を指すことのほうが多いとみなされていることになる。実際、post-traumatic stress disorder の契機となる出来事は、患者自身が「身体的外傷」を負ったという出来事のみならず、たとえば「他人の変死の目撃」<sup>4)</sup>や、「子供が致命的な病気だと知る」<sup>2)</sup>など

の出来事をも含むとされていることから、ここでの trauma も、身体的外傷に限定されない、心理的に大きな衝撃を受けた体験を指しているものと解釈するのが妥当であろう。一方、日本語辞書によれば「外傷」とは「外力によってうけた傷」（大辞林第3版、三省堂、2006年）であるとき、日常語でも医学用語としても、「外傷」という日本語には元来、「心理的な痛手」を指す語義はない。今回の調査対象者が「外傷後ストレス障害」の「外傷」を「身体の怪我」と捉えてしまったのは当然のことだったといえる。従って調査結果にみられたような誤解を防ぐには、post-traumatic stress disorder は「外傷後ストレス障害」ではなく、「心的外傷後ストレス障害」と翻訳するのが望ましいと思われる。

#### (3)病名呼称用語の選定問題

病名呼称用語は行政や報道でも用いられる点からも、医学用語の中でもことに重要性が高いものである。社会や医療・教育場面で誤解や偏見、混乱を生じないように、慎重に配慮して選定・制定されてしかるべきである。本報告でとりあげた3つの病名呼称用語については、筆者の提言が本学会の精神科用語検討委員会で検討され、2008年6月に刊行された同委員会編「精神神経学用語集2008」<sup>1)</sup>には「社交恐怖、社交不安障害」、「素行障害」、「心的外傷後ストレス障害」が採用された。この点、病名呼称用語の選定問題はようやく改善の緒についたとみなされる。

しかしまだ、検討すべき課題は残されている。同一疾病について複数の病名呼称の混在を許容するとかえって混乱を招くおそれがある。たとえば、「社交恐怖」と「社会恐怖」のどちらの用語を推奨するのか、本学会としての方針を定めるべきだと思われる。また、本シンポジウムの他の演題で議論されているように、ICD や DSM の英語病名に depression, depressive を含む病名をどう翻訳するかも大きな問題である。ICD や DSM の翻訳においては、少なくとも病名呼称の部分に関しては学会の用語検討委員会などが関与し、丁寧に

表2 病名呼称用語の日本語訳を選定する基準

- 
1. その疾病分類体系の分類・命名の理念を反映
  2. わが国の伝統的な用語との異同や関係性をそれなりに反映
  3. 病名に用いられた英語の原意にふさわしい
  4. 可能なかぎり簡潔
  5. 一般の人々が訳語からその症状内容をおおよそ推測できる
  6. 他の疾病・障害・症状と混同・誤解されにくい
  7. 患者に対する偏見を助長しない
- 

調整が図られるべきではないだろうか。その際、どういう翻訳が妥当であるのか、訳語の選定基準が設けられることが望ましい。既成の基準があるわけではないが、ここで筆者が常識に照らして妥当と考える訳語選定基準は表2のとおりである。ここに挙げた7つの条件をすべて完全に満たすような訳語を見出すのは容易ではないが、少なくともこの条件のどれかに明らかに背反する訳語は避けられてしかるべきであろう。

### 5. ま と め

英語から翻訳されて既に流布している病名呼称用語の中には、人々にその症状を誤解させるおそれの強いものがあることを、アンケート調査結果にもとづいて指摘した。この点に関連して、「精

神神経学用語集2008」に「社交恐怖(社交不安障害)」、「素行障害」、「心的外傷後ストレス障害」という翻訳が採用されたことは改善と評価してよいと思われる。しかし、今後、同一疾病に複数の翻訳病名が混在する事態となるおそれも生じている。このほかにも病名呼称用語について、学会として対応すべき課題がいくつか残されていることを述べた。

本稿の要旨は第27回日本精神科診断学会学術集会〈2007年10月徳島, 大森哲郎会長〉にて発表したものである。アンケート調査にご協力いただいたフシミ眼科クリニック, 伏見典子院長ならびに職員, 患者の皆様へ感謝いたします。

### 文 献

- 1) 日本精神神経学会精神科用語検討委員会編：精神神経学用語集2008。新興医学出版社，東京，2008
- 2) 高橋三郎，大野 裕，染矢俊幸訳：DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き，新訂版。医学書院，東京，2003
- 3) 竹林滋編集代表：新英和大辞典，第6版。研究社，東京，2002
- 4) 融 道男，山根允文，小宮山実ほか監訳：ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン，新訂版。医学書院，東京，2005